

特集

大人も子どもも 甲状腺エコー検査を受けましょう!

先月、鎌田 實^{みのる} 諏訪中央病院名誉院長の、ユーリ・デミチク医師からの聞き取りが、ヤフーニュースに掲載され話題になりました。ベラルーシ共和国の甲状腺学の第一人者であり、ミンスクの甲状腺がんセンターの所長だったユーリ・デミチク医師は、毎年1000人ももの甲状腺がんの手術を行ってきました。残念なことにこの3月に急逝されましたが、亡くなる前、鎌田氏に対してデミチク医師は、



鎌田医師（左）とデミチク医師

「子どもの甲状腺がんは、リンパ節転移する確率が高いのが特徴。ベラルーシ共和国で手術せず様子を見た例と、手術をした例とでは、子どもの寿命は格段に違った。手術すれば、ほとんどの場合、高齢者になるまで健康に生きることができる」
 「見つけなくていいがんを見つけた、なんて言うてはいけない。見つけたがんは必ず手術した方がいい。数年経過を見たこともある。すると、次にする手術は大きな手術になった」
 「だから、見つけたがんはすぐに手術をした方がいい。それが30年間チェルノブイリで甲状腺がんと闘ってきた自分の考えだ」

と語っています。いま環境省と県が連動して「過剰診断」説を根拠に甲状腺検診を希望者だけに縮小しようとしています。デミチク医師の言葉は、この動きに対しても大事な警鐘です。原発事故と関係があったかどうかは、チェルノブイリでも事故から7~8年かけて因果関係が証明されていったことを考えると、検診をしっかり続け、早期発見・早期治療をし、子どもたちの命を救うことが何よりも大切です。

お知らせ 第2回シンポジウムの報告集できました

3月12日に福島市で開催した「第2回 被曝・医療 福島シンポジウム」の報告集ができました。当日の全発言のほか、1月18日に韓国で行われた「原発と健康」韓日シンポジウムの報告も収録しました。ふくしま共同診療所でお買い求めください。郵送も致します。
 【電話】024-573-9335 【FAX】024-573-9380
 【メール】fukukyocli@ark.ocn.ne.jp
 【頒価】1部650円（送料無料）
 （2部以上申し込みの際は、1部あたり550円）

編集後記 鎮火までに10日以上もかかった浪江町の山火事。「放射性物質の飛散を懸念」と書いた和歌山の新聞社が、風評をおおると叩かれ謝罪文まで掲載させられた。しかし実際には火災前の十倍近い線量になった地点もあった。この新聞社に対する謝罪もなく、「健康に影響ない数値」と言われても信用できる訳がない。（え）

パネリストから

- ・大瀧 慈さん（広島大学原爆放射線医学研究所）
- ・キム・イクチュンさん（前原子力安全委員会委員／反核医師の会運営委員／東国大学医学部教授）
- ・山田 真さん（放射能から子どもたちを守る全国小児科医ネットワーク代表）
- ・布施幸彦（ふくしま共同診療所院長）

ビデオメッセージ

- ・アレックス・ローゼンさん（核戦争防止国際医師会議ドイツ支部会長代行）

寄稿

- ・山口研一郎さん（やまぐちクリニック院長／現代医療を考える会代表）

会場・アンケートから

- 1・18韓日国際シンポジウム報告

ふくしま共同診療所 Newsletter

第17号 季刊-春・夏号-

診療時間：9：30-12：30/14：30-18：00

	土	日	月	火	水	木	金
午前	●	●	●	●	-	●	●
午後	●	●	-	●	-	●	●

診療科目：内科/放射線科/循環器科/リウマチ科
 〒960-8068 福島市太田町20-7 佐周ビル 1階
 TEL:024-573-9335 FAX:024-573-9380

ここから通信

隠されていた事故当時4歳児の小児甲状腺がん

カウントされないがんが多数の可能性

先日、NHKなどの報道で、原発事故当時4歳の男児（現在10歳）が、福島県立医大で甲状腺摘出手術を受けていたにもかかわらず、県民健康調査の「悪性ないし悪性疑い」の数にはカウントしていなかったことが明らかになりました。この男児は、2014年の2巡目の検査（本格検査）の二次検査で経過観察（保険診療）となり、2015年に穿刺細胞診で悪性と診断され、2016年前半に甲状腺摘出手術を受けてがんが確定しました。この症例は、2月20日の県民健康調査検討委員会で公表されていません。県は、あわてて3月30日にホームページを更新し「県民健康調査の二次検査で『悪性ないし悪性疑い』判定となった方のみ数を集計し検討委員会で報告している。経過観察中に甲状腺がんになった子どもは、県民健康調査のデータに含まれていない」ことを認める内容を掲載しました。

検討委員会の「中間とりまとめ」では「被曝の影響は考えにくい」理由の一つに、「チェルノブイリでは原発事故後に5歳以下で甲状腺がんが多発したのに、福島では事故当時5歳以下の子どもがいない」ことを挙げていました。また昨年12月には、日本財団主催の国際会議を受けて、福島県立医大副学長の山下俊一氏らが、県知事に提出した「甲状腺検査縮小」を求める提言書でも、「0歳から4歳の子どもがいないこと」を「甲状腺がんの多発は被曝の影響とは考えにくい」とする根拠の一つにあげていました。

しかしこの4歳児は2016年前半に県立医大で手術しています。山下俊一氏は県知事に提言した時点でこの4歳児の症例は当然知っていたはずで

健康被害をかくすために検査縮小ねらう

今回の件ではっきりしたことは、県の発表する小児甲状腺がんの人数はウソだということです。二次検査で保険診療での経過観察となった人は、2,523人。この2,523人から経過観察中に甲状腺がんが見つかり手術しても、県民健康調査の資料には載りません。185人と公表されている小児甲状腺がん（および疑い）の人数は実際にはもっと多いのです。今まで県・県立医大・検討委員会は、わざと少なく見せているデータを基にして「放射能の影響はない」と結論づけていたのです。そのウソのデータですら、あまりにも多くの小児甲状腺がんが見つかっています。このまま行くと、チェルノブイリのように「放射能の影響だ」と認めざるをえなくなる。だから甲状腺検査を「希望者だけ」にして縮小しようとしているのです。甲状腺がんを手術している鈴木真一県立医大教授は、甲状腺学会で小児甲状腺がんのデータを発表しています。学会では発表しているのに県民にはウソのデータしか出さない。県民のデータは県民のものです。検査データの公表と甲状腺エコー検査の維持・拡充を要求しましょう。

院長 布施幸彦

早期発見、早期治療が大切です。

健康を守るために大人も子どもも検診を受けましょう!



お問い合わせ、ご予約は
お電話でどうぞ
024-573-9335

福島市 市民検診

受診期間は、6月1日～10月31日です。

一般の検診の他、下記のがん検診が受けられます

- 肝炎ウイルス検査 ●大腸がん検診（一次）
- 肺がん検診（一次） ●前立腺がん検診（一次）
- 骨粗しょう症検診